

# くらしの中で読む『正法眼蔵』

―面授の巻― その六

小 倉 玄 照

〈本文〉

かくのごとく的面授を尊重すべきなり。わづかに心跡を心田にあらはせるがごとくならん、かならずしも太尊貴生たいそんきせいなるべからず。換面に面受し、回頭に面授あらんは、面皮厚キコト三寸なるべし、面皮薄キコト一丈なるべし。すなはちの面皮、それ諸仏大円鏡なるべし。大円鑑を面皮とせるがゆゑに、内外無瑕翳なり。大円鑑の大円鑑を面授しきたれるなり。

まのあたり釈迦牟尼仏をみたてまつる正法を正伝しきたれるは、釈迦牟尼仏よりも親曾なり、

眼尖より前後三三の釈迦牟尼仏を見出現せしむるなり。かるがゆゑに、釈迦牟尼仏をおもくしたてまつり、釈迦牟尼仏を恋慕したてまつらんは、この面授正伝をおもくし、尊崇し、難値難遇の敬重礼拝すべし。すなはち如来を礼拝したてまつるなり、如来に面授せられたてまつるなり。あらたに面授如来の正伝参学の宛然なるを拝見するは、自己なりとおもひきたりつる。自己なりとも、他己なりとも、愛惜すべきなり、護持すべきなり。

〈現代語私訳〉

このような面授を大切にすべきである。それは言ってみれば師の心のあとかたをわが心の上にほんのわずかにするすようなものであるうか。かならずしもありがたくもったいぶったものではない。ちよいとうなづいて師の心を受けとめ、ふとふりむいて弟子に仏法の真髓を伝える——師と弟子がいのちを伝えあう面の皮のありようは不可思議で、厚いと思えば三寸、薄いと思えば一丈。つまるところその面の皮は、諸仏が大自然の摂理を余すところなく写す大きな円い鏡にすぎない。大きな円鏡を面の皮と考えれば、表面にも内面にも瑕きずもないし翳かげもない。(師と弟子の面授のありようは) 大円鏡が大円鏡を目のあたりにして光を授けそれを受けるようなものである。

まのあたりに釈迦牟尼仏を見たてまつることによって代々その正法を正しく伝えて来た眼前

の師は、歴史上の釈迦牟尼仏よりも親しみ深い存在で、生きたまなざしからおりおりに数限りない釈迦牟尼仏をあらわして下さる。こういう次第であるから、釈迦牟尼仏を大切に重んじ、釈迦牟尼仏を慕いたてまつるには、何よりもこの面授による正伝を重んじ、尊わがび崇め、めつたなことで出会えるものではないことと認識して(師を) 丁重に礼拝すべきである。それはつまるところ如来ほふを礼拝したてまつることである。それはまたとりもおさず如来ほふの面授を頂戴し奉ることでもある。ここにあらたに如来が如来に面授するという正伝のあり方は今も昔のままだということを参禅学道によって明らかにしてみれば、今のこの自己がはたして如来と言えらるのだろうかと思われてくる。しかしながら自己が如来であるうけがと肯われようが肯われまいが、如来のいのちが今に伝えられているという確信を大切に護まもり持たたねばならぬ。

## がま・みみずも仏

師の生きざまを資（弟子）が素直に肯定できれば、面授も面受もそんなにむずかしいことではありません。ところが、人間には我見というものがありますからそれは想像以上に困難なことです。

『正法眼蔵随聞記』には、修行の要諦を語っている師の話を正しく受けとめるためには自分がよく承知していると思っている心をいったん放棄して、その師が語るところに随って漸次改めていくことだと示された後に、

「仮に仏というのは、自分の承知しているところでは、お顔だちが神秘で、神々しい光明が備わっており、尊い法おしえを語り、衆生むしひとを救って下さる徳にみちた釈尊とか、阿弥陀様とかのことだとイメージしていても、指導の師が、仏というのはヒキガエルとミミズのことだと言ったら、

素直にそれらを仏と信じて、ふだんから抱いているイメージを捨てるのである。その場合、このミミズの上に仏として神々しいお顔や光明、或いは仏のさまざまなお徳を見出そうとするのは、これはやはり自分流の我見を捨て切っていないことになる。ただ、眼前にあるそのものをそのまま仏であると肯ううけがことが肝要なのである。もしこのように指導の師の言葉に従って、先入観とか我見とかを捨てて改めていくと、ひとりだに自然の摂理に添うようになるものだ」(巻二)

と述べておられます。釈尊の時代から遠ざかるにつれて、人間は我見が強くなり、自分の見識をふりまわして、師の見解を否定したりすることが多くなるから困るとも嘆いておられます。仏道がだんだん衰微して行く傾向があるように思えるのも、それが原因だ——とも仰せです。

釈尊もまた、仏法を説く時に常にその点を懸

念しておられました。いわゆる「初転法輪」の故事は、そのことをよく示しています。

釈尊は、悟りを開かれる前、過酷な苦行に身を任せている時期がありました。その頃、五人の修行仲間がいました。釈尊は、修行のむなしさを悟ってそれを捨てました。断食等で極度に痩せた身では真実の人間の生き方を体得するのは不可能ではないか、と疑念を抱かれたのです。そして、滋養物として乳糜、つまり今時のヨーグルトを混ぜた粥を食べられました。すると、五人の修行仲間は「彼はぜいたくである。修行にいらしむことをやめて贅沢に流れてしまった」と非難しました。もちろん、釈尊とたもとを分ち、離れて行きました。

釈尊は、さとりを開かれました。そこで、そのすばらしさを語って聞かせる最初の人にこの五人の仲間を選びました。『阿含経』には、次のように記しています。

「かくしてわたしはあちこちと遊行し、ベナレスの仙人が集まり住んでいる鹿の国(鹿野国)に五人の比丘たちの群れをたずねた。すると、かれら五人の比丘たちは、はるかにわたしが近づいてくる姿を見た。それを見て互いに静止しあうのだった。

〈友よ、あそこに沙門ゴータマがこちらへ向かってやってくる。かれは贅沢で、努力することを怠り、奢侈に走った。だからこちらから挨拶をしたり、出迎えたりする必要はない。ゴータマの衣や鉢を受け取ってはならないが、かれの坐る場所だけは用意しておこう〉と。」

ところが、かつての五人の修行仲間たちはこの約束を守ることが出来ませんでした。釈尊が近づいてこられると、その風格に気圧けおされてしまつて、ある者は衣鉢を受け取り、ある者は洗足の水を用意しました。最高の礼をもって迎え、〈友よ〉と呼びかけました。その時、釈尊は〈友

よ」という呼びかけを拒否されました。正しく  
覚った者に対しては、謙虚な姿勢を持たなければ  
ならない。「法を聞く」耳を用意しなさい、と  
注意されました。

師の説くところを正しく受けとめるためには、  
まず師の前に謙虚な姿勢をとる必要があるとい  
う釈尊の厳しい態度は、実に重要なことなので  
す。

禅門では、修行の道場（叢林<sup>そうりん</sup>）に入門すると  
き、我見を折って素直な気持ちで指導者の指導  
が受入れられるようにということを第一番に考  
慮した受入れ方をします。

そのために、臨済宗の道場では「庭詰め」と  
いう行をするようです。到着した時の服装のま  
ま玄関の式台の上に腰かけ、廊下に手をついて  
入門を乞うのです。いささかいびつな姿勢です  
が、朝から晩課の四時頃まで、二日間ばかり、  
殆どみじろぎもせずにかたかたを保つのです。

相当な難行です。

曹洞宗では、庭詰めはありません。入門を乞  
う板<sup>いた</sup>を打てば、すぐに到着所に案内してくれま  
す。しかし、そこで旅装を解いて、荷物を整え  
て壁<sup>かべ</sup>際に安置すると、それに向って正座をさせ  
られます。入門の許可が出るまで、正座して待  
つのです。およそ一日。態度に謙虚さや真剣さ  
が見えなければ即刻追い出されてしまいますか  
ら必死の一日です。

庭詰めや到着所での入門を乞う行を通過する  
と、次は旦<sup>たん</sup>過寮<sup>かりよう</sup>。入門者の我見の角<sup>つの</sup>を折り、僧  
堂生活を送るに必要な基礎教育を施す役割を担っ  
た寮である。外から丸見えの部屋に、壁に向つ  
て日がな一日坐禅をして生活します。大学まで  
卒えて、いっぱいしの社会人として通用するはず  
であった男が、ここに身を投じてみると、着物  
は身につかないし、箸一本の扱いすらが教わっ  
ても教わってもうまく出来ません。一所懸命に、

必死の思いでやっているはずの行動が、古参雲水のきびきびした行動の前には目だるく見えてしまうのです。頭ごなしにどやされるといささかむつとすることも多いのですが、からだのこなしが実際になっていないのだから仕方がありません。やみくもに叱られているうちに、何をいわれても「ハイ」と言わざるを得ないような心境になって来ます。我見の角が折れたのが指導者によって認められる頃、やっと且過寮から解放されて、一人前の雲水として修行生活を始めることが許されます。

昔も今も、修行生活の第一歩は弟子が師に心服し、日常のどんなささいなことであっても師の指導に従って師のやり方をまねることから始まるのです。

### くせものは太尊貴生

釈尊は偉大なる存在です。それゆえに、眼前

の師が釈尊のいのちを伝えているといえばその身心にありがたさがみちあふれているはずだと考えがちです。ところが、釈尊のいのちを伝えた眼前のわが師にそんな尊くありがたいイメージを抱いたりしてはいけないのです。畑の草を取ったり、採集した菜っぱを小川で洗ったり、或いは洗濯物を干したり、という日常の茶飯事をさりげなくこなしている師の姿こそが釈尊のいのちを伝えるありようなのです。淡々と地水火風（四大）と親しみつつ生活する師の姿を非凡なことに思え、それに手を合わせるような心境になった時、師と資の面授が成就すると申してもよいでしょう。

師の顔に後光がさしていたりすれば、誰でもが手を合わせることが出来ます。しかし、平凡な日常の些事を淡々とこなす師を拝み、それを真似することは、想像以上にむずかしいものです。

その人柄などに心酔して自ら志願して弟子入りした場合は、ことは比較的簡単です。このごろ一般寺院の師資の関係は、殆どがそうなのですが、父と子がそのまま師と弟子という間柄になると話がむずかしくなります。資の我見を叩きのめすわけにもいかず、資を簡単に放逐してしまうことも出来ないのが、血縁のしがらみというもののなのです。資がいわゆる「甘え」を捨てきれずに苦しむのもそれが原因しています。

道元禪師が、

「おほよそ無上菩薩は、出家受戒のとき満足するなり、出家の日にあらざればしょうまん成満せず」〔正法眼蔵〕出家）

と、出家の重要さを強調されるのも、血縁のしがらみが師と資の面授受面を妨げることを強く懸念しておられたからなのです。

しかし、現代の宗門寺院の師資の関係は、父と子、つまり血肉相続が殆どです。出家によつ

て師資となるのは例外と言ってもよいような状況なのです。面授受面が相当に困難なことになっていると言ってもよいでしょう。

しかし、その困難を克服しなければ、宗門の命脈は絶えてしまいます。ではどうすればよいか。釈尊の実子ラゴラ尊者は、出家した釈尊を慕って王家から自らも出家しました。最初から釈尊の偉大さに帰依しての出家ですから、血縁のしがらみを克服しやすいと言えましょう。ラゴラ尊者の方から父親そのものを太尊貴生と信じて帰依しているのですから、例えば東司（便所）の作法すらをそのまま素直に受容できます。

しかし、現代の寺院の父子の関係は、恩愛にどっぷりつかったままの関係の中で「出家受戒」の儀式を行わずのですから血縁のしがらみが断ち切れていません。

こういう場合にはどうすればよいか。それを克服するキイワードは、「太尊貴生」です。とか



くすると、師の側が「太尊貴生」を尊重しがちになる傾向があるのでそれに気をつけなければならぬのです。子が乳幼児の時から平凡に徹した、平常の生活を大切にする生き方をしなければならぬと申した方がわかりやすいかも知

れません。

名聞利養の誘惑の多い現代社会で、そういう生き方は相当に困難なことです。けれどもそれ以外に血縁のしがらみの中で面授面受を成就する生き方はないと申してよいでしょう。